

こもれび

病児に寄り添う存在 大切

「上へなるまでの半年間、娘は遊びのボランティアと一緒に楽しい時間を持つことができました」

仙台市青葉区の宮城県こども病院で九月上旬にあつた交流会。子どもを病気で亡くした親として招かれた

東京都練馬区の水島洋子さん(画)が語り始めた。

長女の佳奈乃ちゃんは五歳だった二〇〇一年、悪性リンパ腫を発病し、都内の病院に長く入院した。視力の低下が進み、最後は全く

目が見えなくなつた。失明に恐怖を覚え、友だちと遊べないストレスに不満を募らせた。「もう病院にいたくない」。毎日泣いていた。

そんなころ、水島さんは医師を通じて遊びのボランティア団体「ガラガルドン」を知る。ボランティアが病院に来て、一緒に遊んでくれるという。すぐに申し込んだ。

訪問は週三回。あやとりをしたり、ピースをつない

遊びのボランティア

だり。医師と看護師としか接しない佳奈乃ちゃんにとつて、ボランティアは友だちのような存在だった。

「以前はわたしがちよつと席を外しただけで不満を言っていたのに、ボランティアが来てからは『もう戻ると信じている。』」

「医師も親も子どもの病気を治すことで手いっぱいになってしまつ。子どもに寄り添い、一緒に遊んでくれるボランティアの存在は重要です」

それから三年。水島さん(夕刊編集部・神田一道)

夕刊編集部・神田一道